

介護殺人事件の被害者加害者の行動特徴より防止策を検討する (2)

A Prevention Method Based on Behavioral Patterns of Victims and Perpetrators of Nursing-related Murders (II)

宮元 預羽

<要旨>

本研究は、筆者がこれまでに行った表題に関連する研究の振り返りと、2016年に報告した「介護殺人事件の被害者加害者の行動特徴より防止策を検討する～115件の新聞記事より～」(長崎短期大学研究紀要 - 平成28年3月 - p 71～77)に対する読者からの質問・指摘事項をもとに、その一部を再分析し、研究ノートとしてまとめたものである。その結果、筆者の研究的立場を再確認し、再分析の結果として、この事件の特徴は、高齢で女性の家族介護者は“悲観”の感情により事件に至る可能性が高いと考えられ、比較的若い男性の家族介護者は“怒り”の感情により事件に至る可能性が高いことが考えられた。介護福祉士等の専門職はその感情に気づき、対処する必要性を改めて確認した。

<筆者のこれまでの研究>

筆者がこれまでに行った介護殺人事件に関する研究を表1にまとめた。筆者は、この事件に関する行動パターンを把握し、未然に防ぐことを目的としている為、被害者を高齢者と障がい者を区別せず、殺人事件に限定せず、未遂事件と心中事件も分析対象としている。そして、いくつかの事件の「情状酌量の余地」は理解できるものの、立場としては「殺人や虐待は犯罪である」とし、その傍で働いている介護福祉士等の社会的責任は重く、その反面、介護福祉士等の専門職は、“このような事件を未然に防げる”という期待は大きい、という立場である。

『行動分析的アプローチによる介護殺人パターン把握の試み—判例をもとに—』は、日本法データベース Westlaw Japan より、この事件に関する裁判判例(2005～2010年)を確認している時に、「同じような背景や環境にいる人が大勢いるなかで、なぜこの人たちは事件を起こしてしまったのだろう。事件を起こす人と起こさない人の違いは何だろう」と疑問に思い、主に精神保健福祉学と行動分析学を専門としていた三橋氏を招いて、理論的行動分析の枠をもとに内容分析の手法で検討したものである。

『介護殺人の行動パターン把握の試み—37件の判例をもとに—』は、量的研究を試みたものの、日本法データベース Westlaw Japan においては37件(1989～2013)が限界であった。三橋氏と、社会福祉学と介護福祉学を専門としていた永嶋氏を招いて内容分析の手法でコード化したものを集計したものである。

『介護殺人事件における加害者特性の一考察～102件の新聞記事をもとに～』と『介護殺人の行動パターン把握の試みⅡ—103件の新聞記事をもとに—』は、朝日新聞社の「聞蔵Ⅱビジュアル・フォーライブラリー」と毎日新聞社の「毎日 News パック」のデータベースを使用し、「介護殺人」「介護・事件」などをキーワードとして検索し、102件と103件の記事(2005～2014年)を分析したものである。これは数百件の事件記事より、11項目の内容分析が可能となったものを102～103件抽出し、分析したものである。事件記事の続編や他の新聞社により情報が追加されているものも確認された為、ダブリがないよう、加害者名と被害者名、地域名、等を記録し、筆者が整理・管理している。尚、統計ソフトはエクセル統計2012を使用した。ここで初めて量的研究における統計的検定をかけることができた。サンプルが約100件と少ないものの、確認できるデータそのものが少ないことを考慮すると、統計的検定をかける意義はあると考えられた。実際、犯罪心理学等の分析においても100件ほどのサンプルで統計的検定がかけられている例を確認している。

『介護殺人事件における加害者特性の類型化～115件の新聞記事をもとに～』と『介護殺人事件における加害者特性の一考察(2)～加害者と被害者の特質をもとに～』と『介護殺人事件の被害者加害者の行動特徴より防止策を検討する～115件の新聞記事より～』は、上記のあげた新聞社のデータベースに加え、更に記事を取り寄せ、115件の新聞記事を収集した。多重コレスポネンズ分析を行う為、統計ソフトはSPSS Statistics23/Categories を使用した。

『介護が関連する殺人事件における加害者の悲観の感情について～判例をもとに～』の内容は、表1の記述のとおりである。分析ソフトは、KH Coder ver2.2.00f を使用し、共起ネットワークを確認した。

表1 筆者が行ったこれまでの研究

著者	宮元預羽、三橋真人	宮元預羽、三橋真人、永嶋昌樹	宮元預羽	宮元預羽	宮元預羽	宮元預羽	宮元預羽	宮元預羽
年月	2013年3月	2014年3月	2014年11月	2015年3月	2015年9月	2015年11月	2016年3月	2016年9月
タイトル	『行動分析学的アプローチによる介護殺人パターン把握の試み一判例をもとに一』	『介護殺人の行動パターン把握の試み一37件の判例をもとに一』	『介護殺人における加害者特性の一検討～102件の新聞記事をもとに～』	『介護殺人の行動パターン把握の試みII一103件の新聞記事をもとに一』	『介護殺人事件における加害者特性の類型化～115件の新聞記事をもとに～』	『介護殺人における加害者特性の一検討(2)～加害者と被害者の特質をもとに～』	『介護殺人事件の被害者加害者の行動特徴より防止策を検討する～115件の新聞記事より～』	『介護が関連する殺人事件における加害者の悲観の感情について～判例をもとに～』
出典	大妻女子大学人間関係学部紀要「人間関係学研究14」(p187～198)	大妻女子大学人間関係学部紀要「人間関係学研究15」(p91～99)	第20回日本精神保健社会学会学術大会(抄録集p6)	大妻女子大学人間関係学部紀要「人間関係学研究16」(p93～107)	第23回日本介護福祉学会大会(抄録集p63)	第21回日本精神保健社会学会学術大会(抄録集p2)	長崎短期大学研究紀要第28号(p71～77)	第24回日本介護福祉学会大会(抄録集p44)
内容	関連する先行研究のレビューと、判例をもとに、行動分析学による理論的行動分析(ABCEH分析)により、介護殺人の行動パターンを把握を試みた。加害者の行動パターンの特徴として、“囁殺”“虐待”“心中”の3つのパターンをピックアップした。特に“虐待”は、A直前(騒ぐ)→B行動(暴力)→C結果(静かになる)、等の誤学習を指摘した。	行動パターンを把握する為、関連する37件の判例をもとに内容分析の手法(ABCEH分析の枠組み)で分析を行った。結果は先行研究を支持するものとなったが、直前直後の行動においてはコード化により、被害者の主症状(認知症症状)、行動を起こすきっかけ(言うことを聞いてくれない)、等が明確化された。	関連する新聞記事102件を内容分析の手法でコード化し、クロス集計、 χ^2 検定、コレスポネンズ分析で検討した。その結果、特に70～80歳の夫婦の男性で、要介護者に認知症症状があるものにはリスクがあるのではないかと考察した。	関連する103件の新聞記事を内容分析の手法でコード化し、クロス集計と、それぞれの χ^2 検定とコレスポネンズ分析を行った結果、そのリスクとして、早朝、夜間、深夜の時間帯と被害者の認知症症状との関連、その他、ジェンダーの課題、エイジズムの課題等の特徴を明らかにした。	関連する新聞記事115件を内容分析し、コード化し、多重コレスポネンズ分析を行った。加害者特性の分析した。その結果、「高齢加害者夜間深夜型」、「若年加害者認知症暴行型」、「女性加害者未遂心中型」の3つの加害者特性が分類された。	関連する新聞記事115件を内容分析し、コード化し、多重コレスポネンズ分析を行った。加害者特性と被害者特性を分析した。その結果、「悲観タイプ」、「嘆きタイプ」、「怒りタイプ」の3つの加害者特性と思われる分類がなされた。	関連する115件の新聞記事を内容分析の手法でコード化し、多重コレスポネンズ分析を行った。その結果、介護者の“悲観”と“怒り”の感情に気づく必要性、夜間帯の介護スキルの解消、介護スキル教育支援(特にBPSDへの支援)、介護者と要介護者の双方のメンタルヘルス面のリスク管理支援、などの防止策が考察された。	関連する判例で、“悲観”と比較対象の“怒り”の感情を特徴とする、それぞれ5件の判例をピックアップし、語と語の出現パターンを共起ネットワークで確認した。その結果、“悲観”は“絞殺”、“怒り”は“態度”と“暴行”との関連が確認された。

<「介護殺人事件の空間マッピング」について>

「介護殺人事件の被害者加害者の行動特徴より防止策を検討する～115件の新聞記事より～」(長崎短期大学研究紀要 - 平成28年3月 - p 71～77)の図3においては、被害者と加害者の行動特徴をもとに多重コレスポネンズ分析を行い、加害者の感情を“怒り”と“悲観”の2つに分類したが、読者より、次元1と次元2のそれぞれの特徴を明らかにするよう指摘を受けた。よって、再度分析したものを図1に示した。次元1と次元2の寄与率の表示と、次元1と次元2の特徴を矢印で示したものは、今回新たに再分析したものである。尚、データのプロフィールは「介護殺人事件の被害者加害者の行動特徴より防止策を検討する～115件の新聞記事より～」に記載されている為、今回は割愛させて頂く。

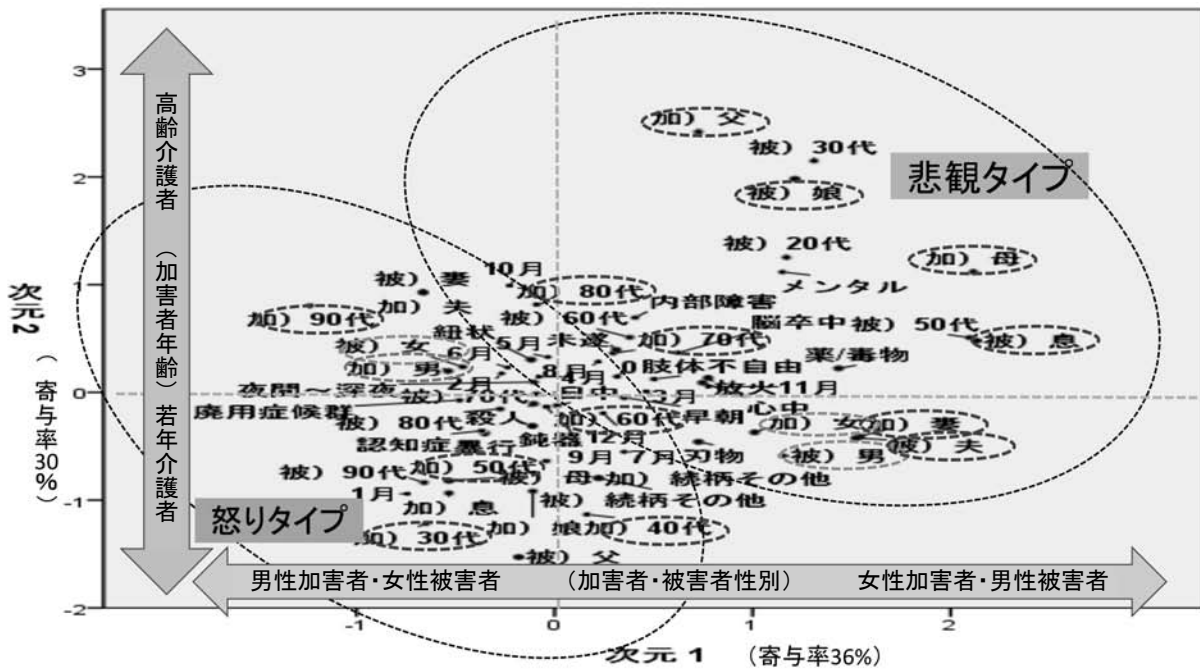


図1 介護殺人の事件の空間マッピング (被害者・加害者特徴)

図1の寄与率は、次元1が36%、次元2が30%、累積寄与率が63%である為、まずまずの結果といえよう。次元1の特徴は、加害者が夫で被害者が妻、のように、男性加害者と女性被害者の組み合わせになるほど“怒りタイプ” (負の方向) に近づき、その反対に、加害者が親 (母親等) で被害者が子 (息子等) のように、女性加害者と男性被害者の組み合わせになるほど“悲観タイプ” (正の方向) に近づくことを表している。次元2の特徴は、家族介護者として比較的若い世代の30歳代、40歳代、50歳代の加害者が“怒りタイプ” (負の方向) に近づき、70歳代、80歳代の高齢家族介護者である加害者が“悲観タイプ” (正の方向) に近づくことを表している。“悲観タイプ”の被害者には、20歳代、30歳代、50歳代、という特徴が表れている。尚、115件の記事においては40歳代の被害者は確認できなかった。

<まとめ>

今回、この分野における他の研究者の先行研究の引用は省略しているが、介護殺人事件に対する先行研究の多くは、社会福祉学や社会学の立場にある研究であり、特に社会システムの構築が強調されている。しかし、社会システムの構築は早急に行う必要性は高いものの、構築するまでには時間がかかり、その間に、このような事件は起き続ける。そのことを考慮すると、早急にできることを検討する必要がある。その為には、利用者や家族介護者に近い距離にあり、直接ケアにあたる、介護福祉職や看護職等の再教育が早急の課題だと筆者は考えている。近年は、認知症症状と虐待や殺人事件の関連が明らかになりつつあるものの、直接ケアにあたる介護福祉職に関連ある介護福祉学の知見での研究・対策が少ないことも懸念の一つである。保健・医療・福

社の専門職は、利用者およびその家族、家族介護者、あるいは同僚の、“怒り”の感情や“悲観”の感情を察し、それが虐待や殺人事件に関連するものか見極め、適切に対処するスキルを身につけることは、我が国における介護者支援制度の構築を待つより早いのかも知れない。

また、今回の研究においては直接触れられてはいないが、ここ数十年の間、介護福祉士をはじめとする介護職のネガティブな報道が絶えず、人材不足に更に拍車がかけられている現状にある。しかし筆者は、介護福祉士の方々から、利用者の立場に立ち、同僚の施設職員の虐待問題を告発したり、改善する活動をしたり、家族介護者の異変に気づき、介護支援専門員等に報告・連絡・相談し、事件を未然に防いでいたり、社会正義の名のもと、時には自己犠牲を払って介護福祉職を続けている方の相談や報告を受けていることも事実である。介護福祉士は福祉士である故、ソーシャルワーカーと同様に、その利用者に対する守秘義務や人権擁護の観点より、このような活動のアピールを公にできない立場なのかも知れない。報道機関やこの分野の研究者は、介護福祉職を辞めた者ではなく、介護福祉職を続けている者にもう少しスポットをあてると、このような嘆かわしい事件を防ぐ術や人材確保のヒント等が明らかになるのではないかと筆者は考えている。